

タイトル

氷の王子・氷室さんの秘密

あらすじ

主人公・小日向陽子（こひなた・ようこ）の働いている雪城商事には、女子社員の憧れの的となる人物がいる。

イギリス人と日本人のハーフで、輝くような銀髪と青い瞳が特徴の先輩・氷室凍矢（ひむろ・とうや）は、無表情でも整った美貌で、性格はクール&ドライ。

陽子に対しても辛辣な態度を崩さない、通称『氷の王子様』。

しかし、ある休日、街に出かけた陽子は、偶然雑貨屋さんで氷室に遭遇する。

しかも、彼は買い物かごに可愛いグッズを盛りだくさんに入れていて……。

「可愛いもの好き」という氷室の秘密を知ってしまった陽子は、ふたりきりの秘密にすると約束する。

ふたりはいちごスイーツを食べに行き、カップルのふりをしたりと甘酸っぱい関係が続ける。

そしてある夜、映画館の帰りに豪雨に降られ、ホテルの一室に入って一夜を過ごすことに……。

氷室「——僕がシャワー浴びてる間に、逃げないでね？」

こうしてふたりは恋人になったのであった。

本文

第1話

*背景：オフィス（昼）

*SE：電話の音や人のざわめき

*立ち絵：氷室（通常）

氷室「はい、雪城商事でございます」

陽子（氷室先輩、今日もキレイだなあ）

陽子（イギリス人と日本人のハーフって話だけど、銀髪が日光を反射してまぶしい……）

氷室「——さん、小日向さん」

陽子「……ッ！ はいっ？」

*立ち絵：氷室（ジト目）

氷室「なにボーッとしてんの、邪魔なんだけど」

陽子「あっ、すみません……」

氷室「工作中なんだから、ちゃんと集中して」

陽子「すみません……」

*立ち絵：非表示

——私は小日向陽子（こひなた ようこ）。28歳のOL。

いつもこの先輩——氷室凍矢（ひむろ とうや）さんに見惚れては叱られてしまう。

*背景：暗転→更衣室（夜）

同僚A「氷室さんってやっぱ怖いよね」

同僚 B「まさに『氷の王子様』って感じ」

陽子「氷の王子様、かあ……」

陽子「たしかに氷ってキレイだし、王子様っていうのもわかる……」

同僚 A「……小日向さんって、氷室さんにキツめのこと言われてもへこたれないよね」

同僚 B「まあ、そのくらいじゃないと、あの人とはやっていけないっしょ」

陽子「えへへ、恐縮です」

同僚 A「いや、褒めてるわけではないんだけど」

笑い声が更衣室の中に響く。

そう、私は氷室さんに好意を寄せている。

……彼にはどうも、好かれているとは思えないけれど。

*背景：暗転→廊下（夜）

陽子（ふう、着替えたし帰るか）

*立ち絵：氷室（通常）

陽子「あっ、氷室先輩。お疲れ様です！」

氷室「……なんだ、小日向さんか」

*立ち絵：氷室（ジト目）

氷室「君、挨拶だけは元気だよな」

陽子「元気だけが取り柄ですから！」

氷室「……………あっそ」

陽子「あっ、そうだ。よかったらこのあと一緒に夕飯でも食べに行きませんか？」

氷室「遠慮しとく。僕、他人と一緒にご飯食べるの落ち着かない」

陽子「飲み会とかも行きたがりませんもんね」

氷室「……なんで知ってるの」

陽子「なんで、と言われてましても……」

陽子（な、なんか『氷室先輩のことを逐一チェックしてるヤバい女』みたいな目をされている……!）

氷室「……まあいいや。じゃあ、おつかれ」

陽子「あっ、はい！ お疲れ様でした！」

*立ち絵：氷室非表示

陽子（……ふう。まさか帰りに氷室先輩に出くわすなんて、ドキドキしたなあ）

陽子（明日休みだし、会社終わりに先輩に会えて良かったかも）

陽子（えへへ、また会社に来るのが楽しみだなあ）

*背景：暗転

——このときの私は、まだ知らなかったのだ。

まさか、この私がああ氷室先輩の秘密を知ることになるなんて……。

*背景：街（昼）

——休日の街。

陽子（せっかく休みだし、家でゴロゴロしようかと思ったけど、やっぱり外に出ると活気があっていいなあ）

陽子（買い物を済ませたら、家に帰って家事もしなくちゃ）

陽子（——あっ、この雑貨屋さん、また可愛いの入荷してる）

*背景：雑貨屋

陽子（へえ、今回はカエルグッズフェアかあ）

陽子（このアマガエルの形をした箸置きとか可愛いな、1つ家に欲しい……）

陽子「……っ！？ あ、ごめんなさい！」

*立ち絵：氷室（マスクとサングラス）

??? 「い、いえ……」

陽子（知らない人と手が触れ合っちゃった！ この人も箸置き、ほしいのかな？）

陽子「あの、よかったらどうぞ」

??? 「いや、僕は……」

陽子「……あれ？ この声って——」

陽子（サングラスとマスクをして顔は隠れてるけど、このイケメンボイスは……）

陽子「……もしかして、氷室先輩ですか？」

氷室「……………」

*立ち絵非表示

*スチル：マスクとサングラスを外し、赤面した氷室と、買い物かごいっぱいのカエルグッズ

氷室「……なんで小日向さんがここにいるの、とか、なんで声だけでわかるの、とか、色々言いたいことはあるけど……」

氷室「とりあえず、僕と一緒に来て」

陽子「え、でも……」

陽子「買い物かごの中身、レジに持ってかなくていいんですか？」

陽子（よく見たら可愛いグッズがいっぱい詰まってるな……）

*スチル非表示

*立ち絵：氷室（赤面）

氷室「〜〜！！！」

氷室「今！ 精算を済ませてくるから！ ちょっと待ってて！」

氷室「逃げたら承知しないから！」

陽子「別に逃げませんよ……」

*背景：暗転

*立ち絵非表示

そして、買い物を終えた氷室先輩に拉致されて、私たちは喫茶店へ……。

*背景：喫茶店

*立ち絵：氷室（ジト目）

氷室「……お願いがあるんだけど」

氷室「小日向さんなんかをお願いするのは、すごく不本意だけど！」

陽子「なんで私そんなに氷室先輩から信頼ないんですか??」

氷室「今、僕が喋ってるから黙って」

陽子「アッハイ」

氷室「——今日あったことは会社の誰にも言わないでほしい」

氷室「僕に街で会ったことも、僕が雑貨屋にいたことも、」

陽子「氷室先輩が可愛いもの好きなことも、ですか」

*立ち絵：氷室（赤面）

氷室「〜〜〜……」

陽子「別に言いませんよ」

陽子「これは、私と氷室先輩の秘密、ということで」

氷室「そ、そう……」

陽子（氷室先輩、安堵のため息をついてる……よほど知られたくないんだな）

——こうして、私と氷室先輩の間には、ふたりだけの「秘密」が生まれたのでした。

*立ち絵非表示

〈続く〉

第2話

*背景：暗転

——雪城商事に勤めている、女子社員の憧れ。

輝く銀髪に、青い瞳。

無表情でも顔立ちは美しく、性格はクール&ドライ。

通称『氷の王子様』、氷室凍矢。
彼には、誰にも言えない秘密がある。

*背景：オフィス（昼）

陽子「……ん？ スマホにメールが……」

『小日向さんへ』

『大事な話がある。
昼休みに、会社近くの喫茶店に来て』

『氷室』

陽子（わざわざメールで呼び出すなんて、何の用事だろう……）

*背景：暗転→喫茶店

そして、昼休み——。

*立ち絵：氷室（通常）

氷室「誰にも見られずに来た？」

陽子「そんなに警戒するような用事なんですか？」

氷室「当たり前でしょ。僕、小日向さんと一緒にいるとこ、見られたくないし」

陽子「私そんなに氷室さんに嫌われるようなことしました？」

氷室「いや、……そんなんじゃ、ないけど」

氷室「……ごめん」

陽子「別に気にしてませんよ」

陽子「それで、何のためにここに私を？」

氷室「……ええと、その」

氷室「これ……」

陽子「チラシ……？」

陽子（あ、ホテルの一階を貸し切っていちごフェアをするスイーツのイベントだ……）

氷室「これに、一緒に来てほしい」

陽子「え？」

陽子「おひとりで行かないんですか？」

*立ち絵：氷室（赤面）

氷室「お、男がひとりでこんなイベントに行ったら浮いちゃうでしょ」

氷室「少しはものを考えて」

陽子（うーん、相変わらず辛辣ッ！）

陽子「まあ、いいですけど」

氷室「……ほっ」

*立ち絵：氷室（通常）

氷室「それじゃ、今度の日曜日、午前 11 時に、現地集合で」

陽子「わかりました」

氷室「……お礼、と言ってはなんだけど」

氷室「ここのお昼、僕が奢る」

陽子「あ、いいんですか？　じゃあ遠慮なく」

*背景：暗転

*立ち絵非表示

——そして、日曜日。

*背景：いちごフェア会場

*立ち絵：氷室（私服）

陽子「すっっっっごいピンクな空間ですね……」

氷室「だから言ったでしょ、僕ひとりで来たら浮くって」

陽子「これは……そうですね……！」

いちごフェアというだけあって、その会場内には特有の甘酸っぱい香りが満ちている。

店員「カップルの方ですか？」

陽子「え？」

店員「カップルの方には特別に限定いちごプリンを差し上げております」

氷室「まごうことなきカップルです」

陽子「ええっ！？　即答！？」

氷室（小日向さん、僕に話を合わせて！　恋人のふりをして！）

陽子「……」

陽子「この方とお付き合いさせていただいております」

店員「それでは、ごゆっくり～」

氷室「……」

陽子「……」

*立ち絵：氷室（赤面）

氷室「……………ごめん」

陽子「そんなに食べたかったんですね、いちごプリン……」

氷室「美味しそうだったから……つい……」

陽子「まあ、とりあえず、食べましょう」

陽子「いただきまーす」

*立ち絵：氷室（通常）

陽子「……おっ、なめらかなプリンに甘酸っぱいいちごの味。これはたまりませんな」

氷室「……ん、美味しい」

陽子（氷室さん、一口が小さくて、ちまちま食べてるの可愛いな……）

そう。氷室さんは可愛いものが大好きで、本人もどこか可愛いのである。

陽子「私、いちごパフェも頼んじゃおうっと」

氷室「じゃあ僕は、いちごのショートケーキで……」

背景：トランジション

……

陽子「思ったより大きい、いちごパフェ……」

陽子「これ食べきれるかなあ」

氷室「余ったら僕が食べる」

陽子「よかったら、今、一口食べてみます？」

*立ち絵：氷室（赤面）

氷室「えっ……」

陽子「はい、あーん」

氷室「そ、そんな恥ずかしいこと、公衆の面前でよく出来るね!？」

陽子「だって、私たちカップルですから」

氷室「うぐ……」

氷室「……ぱく」

陽子「美味しいですよね、このパフェ!」

氷室「そりゃ……美味しい、けど……」

*氷室（通常）

氷室「小日向さん、頬、ついてる」

陽子「え？」

氷室「ほら」

*立ち絵非表示

*スチル：氷室が陽子の頬についたクリームを指ですくい取る

陽子「！？ ……！？」

*スチル非表示

*立ち絵：氷室（ニヤリ）

氷室「うん、美味しいね」

陽子（氷室さんが、私の頬のクリームを、舐め……っ！？）

氷室「小日向さんも、僕のケーキ食べる？」

陽子「えっ？」

氷室「はい、あーんして」

陽子「いや……あの……」

氷室「うん？ どうしたの？ 僕たち、カップルなんだよね？」

陽子（仕返しされている……）

陽子「それじゃ、いただきます。……はむっ」

氷室「美味しい？」

陽子「甘い、ですね……」

*背景：トランジション

*立ち絵：氷室（微笑）

氷室「——で、これが僕のお気に入りのテディベアの写真」

陽子「え〜っ、かわいい〜っ！」

氷室「コイツを抱いてベッドに入るとよく眠れるんだ」

陽子「いいですね！」

氷室「……小日向さん」

氷室「君は……僕がぬいぐるみと一緒に寝てても馬鹿にしないんだね」

氷室「……ありがとう」

氷室「ふふ。小日向さんとだったら、他のところにお出かけしても楽しそう」

陽子「じゃあ、またどこか遊びに行きましょうよ！」

氷室「うん。約束」

*立ち絵非表示

〈続く〉

第3話

*背景：暗転

——それからの先輩は、まるで別人のようだった。

*背景：オフィス（昼）

*立ち絵：氷室（微笑）

氷室「小日向さん」

氷室「お昼、空いてる？ 一緒に食べに行こう」

*立ち絵非表示

*背景：暗転→オフィス（夕）

*立ち絵：氷室（微笑）

氷室「小日向さん、今夜、一緒に食事でも」

氷室「レストランと居酒屋、どっちがいい？」

氷室「静かなところがいいなら、行きつけのバーもあるから」

陽子「……」

*立ち絵非表示

*背景：暗転→更衣室

同僚A「小日向さん……いったい何をやったの？」

同僚B「『氷の王子様』が、デレデレに溶けてるねえ」

陽子「よくわかりませんね。なんでかなあ」

*背景：廊下（夜）

陽子「さて、着替えたし、帰るか」

*立ち絵：氷室（通常）

氷室「小日向さん」

陽子「どうわっ、びっくりしたあ！」

陽子「どうしたんですか、氷室さん。待ち伏せですか？」

氷室「小日向さんと一緒に帰りたかっただけだけど……」

陽子「うん、それを世間では『待ち伏せ』って言うんですよね」

氷室「それで、僕と一緒に帰るの？ 帰らないの？」

陽子「別に、一緒に帰るのは構いませんけど」

陽子「あ、そうだ。どうせならどっか寄ってから帰りましょうか」

氷室「じゃあ、映画はどう？ レイトショーで君が見たがりそうなやつがある」

陽子「いいですね～」

*背景：暗転→映画館

陽子「うっ、うっ……いい映画だった……」

氷室「小日向さん、泣きすぎ」

陽子「犬の出てくる映画には弱いんですよお……」

*SE：豪雨の音

*背景：雨の街

陽子「ってうわっ……すごい雨……」

氷室「ゲリラ豪雨だね……」

氷室「この分だと、電車も動いてなさそうだ」

陽子「参りましたね……」

氷室「仕方ないよ。折り畳み傘はあるから、これで移動しよう」

*背景：暗転→ホテル

陽子「だいぶ濡れちゃいましたね……」

氷室「まあ、折り畳み傘程度じゃ大して意味はないだろうとは思ってたけど……」

氷室「小日向さん、先にシャワー浴びてきていいよ」

氷室「これ、着替えのパジャマ」

陽子「ありがとうございます」

*背景：シャワー室

*SE：シャワーの音

陽子（……………）

陽子（……冷静に考えたらこれ、氷室さんと一緒にホテルの一室にいるって、かなりアレな状況なのでは？）

*SE：シャワーを止める音

*SE：衣擦れの音

陽子「氷室さん、シャワー上がりましたよ～」

陽子「……氷室さん？」

*立ち絵：氷室（目閉じ）

氷室「すう……すう……」

陽子「……寝ていらっしやる……」

陽子「……」

陽子（こうしてみると、あどけない顔してるなあ、この人）

陽子（銀髪もサラサラでキレイ）

*立ち絵の氷室の顔周りをアップ

陽子（まつげも長い……）

*立ち絵非表示

*背景：暗転

陽子「——ッ!？」

陽子「ひ、氷室さん……？」

*スチル：氷室にベッドに押し倒されている図（氷室がこちらを見下ろしている）

陽子（氷室さんに、押し倒された……!？）

氷室「……そんなに顔を近づけて……」

氷室「僕に何しようとしたの？」

陽子「ええ……？ いや、まつ毛長いなって思って……」

氷室「……」

陽子「す、すみません、怒ってます……？」

*スチルの氷室の顔アップ

陽子「……っ!」

*スチル非表示

*背景：暗転

*SE：リップ音

陽子「……。……。？」

*立ち絵：氷室（通常）

氷室「僕もシャワー浴びてくる」

陽子「氷室さん……今、額に……」

氷室「うん、だから……」

*立ち絵：氷室（ニヤリ）

氷室「——僕がシャワー浴びてる間に、逃げないでね？」

陽子「……！」

*立ち絵非表示

*背景：暗転

拝啓。

お父さん。お母さん。

私が可愛いと思っていた先輩は、
どうやらただ可愛いだけの先輩ではなかったようです……。

……そのうち、お父さんとお母さんに紹介するかもしれません。

*背景：更衣室

陽子「——とまあ、そういうわけで、氷室さんとお付き合いすることになりました……」

同僚 A「え～っ！？ おめでとう……？」

同僚 B「なるほど、『氷の王子様』の心を、完全に溶かしたわけだ」

陽子「いやあ、お恥ずかしい」

同僚 A「多分、今日も更衣室の外で待ってるんでしょ？」

同僚 B「そうだよ、早く着替えて、行ってあげな」

陽子「はい！」

*背景：廊下（夜）

*立ち絵：氷室（ジト目）

陽子「凍矢さん、お待たせいたしました」

氷室「陽子さん、遅い」

陽子「う……容赦ない……」

*立ち絵：氷室（微笑）

氷室「……ふふ、なんて」

氷室「いいよ、僕は陽子さんのためなら、1時間くらいなら待っててあげるから」

陽子「結構許容範囲広いですね……」

氷室「そのくらいは心を許してるってこと」

氷室「それじゃあ、行こうか。エスコートしてあげる」

——こうして、私は無事に、『氷の王子様』氷室凍矢さんと結ばれたのでした。

*立ち絵非表示

*背景：暗転

『氷の王子・氷室さんの秘密』完